

じる。只でさえ情報検索に手間がかかる観光用システムにバリアフリー情報を追加するとなれば、1つのページではとても情報を提供しきれなくなってしまう可能性が高い。

そこで、当論文では Ajax 技術を利用したシステムの設計を考案する。Ajax 技術を利用すれば、ページの移動数が減少、もしくは不要となり、観光情報とバリアフリー情報の住み分けが可能となる。健常者のユーザであれば、観光情報のみを得られるようにし、障害者のユーザは、必要があればバリアフリー情報にもアクセスできるようになる。

さらに、Google 社が提供する Ajax 技術の代表格である、“GoogleMap”も応用する。観光システムには、利用しやすい GIS の存在は必要不可欠であり、GoogleMap を応用することで、より効率的で分かりやすい観光情報・バリアフリー情報の提供が可能と考える。以下の図は、GoogleMap に先述の”おでかけらくらくまっぷ!”のアイコンを応用したサンプルである。

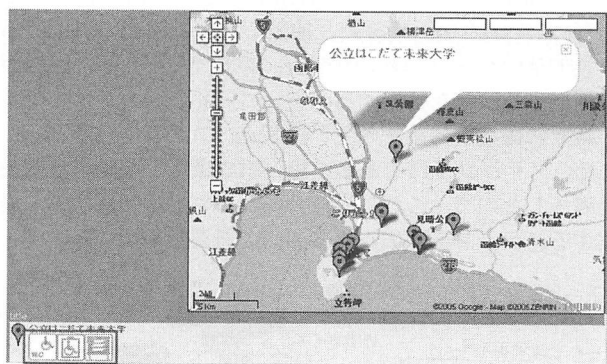


Fig. 3 GoogleMap にバリアフリー情報を応用したサンプル

3. 観光情報との共存

観光情報とバリアフリー情報が共存するシステムを設計・開発するメリットとして、ハンディキャップを持った観光者を新たな客層として取り込めることが期待できる。ハンディキャップを持った観光者にも様々なパターンがあり、車いすで移動する観光者、目が見えない観光者、耳が聞こえない観光者などが存在する。システムの設計・開発にあたり、それらの観光者の持つハンディキャップに合わせた仕様を考慮することもまた重要である。

4. 進捗状況と今後の予定

現在は、車いすで移動する観光者を対象に当研究を進めている。それに伴い、今後は函館周辺の観光施設のバリアフリー対応状況を見学し、また実際に車いすに乗って評価を行うことで、資料やデータを採集していく予定である。システムの完成は、平成 19 (2007) 年明けを予定している。

5. まとめ

この論文では、Ajax 技術を利用した観光用バリアフリー情報システムの設計・開発についての考察を行った。既存のバリアフリー情報サイトでは、情報の提供の仕方に様々な工夫が凝らされているが、バリアフリー情報の価値自体はまだ十分でないという問題が挙げられた。より濃密な価値を持ったバリアフリー情報を提供するには、Ajax 技術を利用することで実現できることが期待される。そして、観光情報とバリアフリー情報を同時に提供するシステムを設計・開発することで、ハンディ

キャップを持った観光者を新たな客層として取り込めることが期待される。現在は車いすで移動する観光者を対象とした研究を進めており、システムの完成は平成 19 (2007) 年明けを予定している。

参考文献

- 1) 永井祐子, 上野善雪. 車いす使用者を考慮した斜路の設計条件. 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸). 1983
- 2) 田平博嗣. 歩道切り下げ部における車いす歩行の負担に関する人間工学的研究. 民明書房. 千葉工業大学. 2000